

## 目的論的、表現的、辨證法的（承前）

高山岩男

### 十一

私は次にカントが解釋學的立場より理性の表現的構造を明かにしたと云ふ提題を論じて見たい。

カントが『純粹理性批判』の先驗的分析論に於て明かにした中心事は、周知の如く、悟性はその法則を自然から導き出すのではなく逆に悟性が之を自然に規定するといふこと、換言すれば理論理性が客觀的自然を構成すると云ふ所謂コペルニクスの轉回を論證したことに存する。之がカントの先驗的唯心論の根本思想に外ならない。我々はこの先驗的唯心論の根本命題をカント自らの『經驗一般の可能性の制約は同時に經驗の對象の可能性の制約である』（die Bedingungen der Möglichkeit der Erfahrung überhaupt sind zugleich Bedingungen der Möglichkeit der Gegenstände der Erfahrung）といふ簡単な命題に要約する事が出来るであらう。『自然』はカントにとつて云ふ迄もなく經驗の對象の總體を意味する。かゝる自然の可能性の法則が經驗の可能性の原

理であり、この經驗の可能性の原理は先驗的主觀の理性的機能に基き、その限り『自然とは普遍的法則に従つて限定されてゐる限りに於ての物の存在である』と云ふのがカントの根本主張である。カント哲學の問題は『經驗』の構成の批判的開明にあつた。『經驗』には『經驗の對象』と呼ばれる客體的側面と『經驗一般』と稱せられる主體的側面が存する。前者は知覺に於て單に與へられる感性的存在であり、後者は單に主體的なる理論理性の諸機能である。具體的なる『經驗』即ち『自然』とは兩側面の綜合として、主體が客體を構成する所に成立するのである。構成とは主體が客體を生み出す事ではない。かゝる事は主體の働きでなく、かゝる働きをもつものは元々主體と云ふべきものでない。構成とは理性の機能に成立する普遍的法則性を課して與へられた感性的客體を客體として定立する事である。勿論與へられたと云うても既に客體として存するものが原因となつて主體なる物に影響を與へる事ではない。感性的な知覺的心的状態が理性の機能に統一せられて客體として客觀化せられる事態を意味するのである。構成と云ふ事は常にかゝる事態を云ふ。——そしてカントが經驗的な個々の主觀に對して特に『先驗的主觀』と稱し、對立の經驗的な意識に對して特に『意識一般』と稱するものは、かゝる『經驗』に於ける主觀の客觀

構成或は客觀化を知る意識即ち自覺を云ふのであつて、彼が先驗的統覺と稱するもの之を現すであらう。かゝる先驗的主觀の自覺即ち自己反省に理性の自己省察たる批判哲學が成立するのである。哲學は理性の自覺である。『自然』が先驗的主觀の客觀化なる事を徹底的に自覺認識する立場が批判哲學であつて、所謂自然科學ではない。併し哲學のかゝる自覺もたゞ自然の究極的な了解によつてのみ可能である。かくして客觀的存在の總體たる『自然』が『先驗的主觀』の表現に外ならぬと云ふ事を論證したのが、カントの劃期的な功業であつて、コペルニクスの轉回の深き意義もこゝに存するのである。

『自然』が『先驗的主觀』の表現であると云ふこの理念は直接的に『先驗的主觀』や『理性』の分析や内省によつて得られるものではない。又かゝる事は原理上遂行せられないものでない。何となれば『先驗的主觀』は分析内省される如き對象存在ではないからである。一般に我々の生活に於て自覺が自己の直觀や内省によつて得られず、寧ろ自己に對立し自己を否定する如き他としての客體に自己を發見するに至つて達せらるゝ如く、カントに於ても理性の自覺即ち自己認識は自然科學の事實に訴へ、『自然』なる表現の解釋を媒介して初めて達せられたのである。彼は『自然』に於て

客觀的ならざるものゝ發見に苦慮し、之を所謂先天的綜合判斷に求めて、之が先驗的主觀の理性的機能に基く事を綿密に論證したのである。この意味で批判哲學の精神を事實を豫想してその權利根據を問ふとするのは正しい。理性の自己認識は『自然』の解釋を媒介してのみ可能である。批判哲學は理性の心理學ではない。寧ろ實驗的な解釋學である。何故實驗的かと云へば『自然』が主觀的客觀的な表現なる事は又解釋することによつてのみ知られるからである。表現はたゞ了解せらるゝ限りに於てのみ表現である。——そしてカントが批判哲學の問題を權利の問題としたのは、所謂事實の問題が元々不可能且循環的な表現の心理的成立の過程を明かにしようとする試みであるに對し、理性の表現的構造を明かにするのが哲學の唯一の本務と考へたからである。批判哲學は『自然』なる事實を前に置いてその解釋より——自然科學は解釋するものではない——『自然』が實は『先驗的主觀』の表現に外ならぬ事を知り、この表現の構造と關係の本質を開明しようとするのである。カントは之を近代の自然科學に基く自然に就て行つたのであるが、之は原理上存在の凡ゆる領域に就て行ひ得ることであらう。カント哲學の眞義は先づかゝる『表現的なるもの』の發見のうちに存する。

併し乍らカントに於て『自然』が表現であると云ふ事は云ふ迄もなくその普遍的法則的方面、簡單に云へば形式的側面にのみ止まる。この事は主觀が客觀を産み出すと云ふ方向にカントの意圖を誤解する限り不徹底の事であらうが、カントの眞意を表現的なるもの、發見にあると見る時は當然の事であらう。表現に於て産出の事態はあり得ず、あるものは構成の事態である。——カントによれば理性は主觀の普遍的法則的即ち形式的機能であり、その限り主觀は先驗的主觀であつて、主觀或は自我の内容は凡て經驗的自然的のものとして考へられた。この經驗的内容が先驗的主觀の反省に於て客觀的對象となるのである。換言すれば『自然』は形式と内容の全體に互つて表現なのではなく、主觀の客觀化せられたものはたゞ形式的方面のみに止まるのである。カントは『自然』なる表現に於て、表現の『意味』なる普遍的法則性を表現せられたものとし、意味の擔はれる『質料』は單に與へられると考へたのである。理性は畢竟普遍的法則性の機能に止まる。『自然』の中には如何に理性の機能を以ても到底盡す可からざる客觀的超越的殘餘即ち『質料』が存する。この殘餘は現實には解釋の程度に應じて程度的なものとして見られるにせよ、飽く迄も原理的の殘餘であつて、之が『表現』たる『自然』の客觀的超越性の根據をなすものである。之がカ

ントの物、自體に外ならない。カントが初めて明かにした理性の表現的構造を少しも知る事なく、カントが批判の對象とした因果性並に實體性の舊き範疇を主體客體の關係に迄混入する人々に甚だ不可能な且矛盾したものと映するこの物、自體は、表現的構造を知る者にとつては何等矛盾なき至極當然のものとなはねばならぬ。批判哲學の立場は因果性や實體性の構造を明かにし、それが自然の即ち對象存在の範疇なる事を批判する立場で、批判哲學それ自體は因果性とも實體性とも異り之等と原理的秩序的に異なる新しき別個の範疇に立脚するのである。之が今云ふた如く表現的範疇に外ならない。この立場からは當然物自體は承認せらるべきで、寧ろ物自體の承認にこの立場が表現的範疇の立場なる事が知れるのである。之を否定しようとする事は表現的範疇を知らざる事を意味するか或は唯心論的迷妄に陥る事を現すに過ぎない。この『物自體』は表現たる『自然』とは異り、その客體的根源或は根據として根源的自然と稱すべきものであらう。或は表現たる『自然』は natura naturalis と物自體たる『根源的自然』は之に對して natura naturans と稱するのがより正當であると思ふ。

『根源的自然』としての物自體はかく表現としての『自然』の缺く可からざる契機を

なし、『自然』の根、據となつて、その超越性の基底をなすものであるが、『根源的自然』の超越性は批判哲學に於て充分に承認する事が出來得ないであらう。何となれば『純粹理性批判』は元々表象認識の立場に立つものであり、表象認識の立場は元々『意識の命題』が現す如く客體の超越性をそのまゝに承認する事の出來ぬ立場であるからである。表象認識の立場に立つ限り『意識の命題』は全く正しい、即ち客體は客體たる限り凡て表象として意識に先づ内在的でなければならぬのである。併し表現的立場に於ては客體の超越性は當然『根源的自然』に基くものとしてそのまゝ顯となる。是に於て表象認識の立場に立つ表現的範疇に於ては『物自體』は一つの理念として超越性を保つより外ないであらう。『物自體』を理念ならぬ超越的實在として顯に保持する立場は表象認識の立場でなく生命の意志、行爲的態度である。こゝに單に表象認識の立場にのみ終始し、そこより出發する從來一般の認識論の抽象性が明かとなると共に、かかる立場に立つ表現的範疇の抽象性が明かとなるであらう。——現實の存在はかかる『自然』であり、『自然』は自體に於て既に客體、主體的存在である。或は前に云ふた如く普遍的法則性なる『意味』を觀念的のものとすれば、『自然』はそれ自體に於て既に實在的、觀念的存在である。眼前の自然は皆かかる實在的、觀念的

『自然』に外ならない。それは既に人類文化によつて彩られた表現に外ならないのである。『根源的自然』はかゝる自然の存在性と超越性の究極根據として存するのである。自然が既に觀念的契機を含むものとして主觀性に依存し乍ら、尙主觀より獨立な自體存在性をもつのも實はかゝる『根源的自然』の超越的實在性によるのである。カントが『純粹理性批判』に説く物自體の真相はかゝるものに外ならぬ。――

カントが物自體と稱した『根源的自然』が一般に『表現』なるものゝ客觀的超越性の根據として缺く可からざるものなる事は以上を以て明かであるが、かゝる『表現』としての『自然』はカントに於て普遍的なる主觀の表現に過ぎなかつた。意識一般と稱せられ先驗的統覺と云はれる先驗的主觀が超個人的普遍的なるは斷る迄もない。カントにとつては個別的な經驗的主觀の如きは經驗の對象となり得るものであつて未だ如何にしても經驗の對象とならぬ先驗的主觀ではない。各個別的主觀は各々自己を主觀と主張するにせよ他より見れば各々經驗の對象に過ぎない。自然はかゝる主觀の表現なのではない、超個人的普遍的なる先驗的主觀の表現なのである。――併し乍らこゝに一つの疑問が生ずるであらう。經驗の對象ならぬ主觀は果して超個人的普遍的主觀のみであらうか。個別的主觀は果して眞實に經驗の



對象となり得るであらうか。事實表象認識のならぬ我々の意志行動的なる生活に於て我々主觀は皆個別的であり、然も經驗の對象となり得るものではない。人格が即ち之である。個別的ならぬ人格はなく對象存在なる人格の如きものはない。先驗的主觀の如きものは個別的主觀を離れては何處にも獨立に存し得る筈はないであらう。——實際この先驗的普遍的主觀と經驗的個別的主觀の關係はカントに於て最も不明の點であらう。併し以上の事態は表象認識の立場に立脚する『純粹理性批判』にとつては避く可からざる當然の事と云はねばならぬ。何となれば主觀の個別性、人格の非對象性は意志、行為的立場に於て初めて眞實の事態を顯すものであつて、表象認識の立場に於ては消失さるゝからである。この事は客體の超越性の事態と同一のものであらう。——それ故この問題は自然と人間の關係とは異なる歴史社會と人間の關係並びに個人と個人の關係に至つて全く別種の姿の解決を迫り來るであらう。カントに於ては自然と人間の關係のみが問題であつた所から、この事は少しも省られず不明のまゝに留るのである。——併しこの事は他面自然と人間の關係に於ては單に表象認識の立場に立つが故にのみ留らず、意志、行動的立場を含む全體の立場に於ても尙人間が普遍的なる事態を現すであらう。何となれば個人が

眞に個人たるは一般的共同的自然に對しては、は、なく他の個人に對しては、あるからである。人格は自然や客觀的精神に對しては、なく他の人格に對して初めて個人的なのである。——

『表現』はもと意識的の事柄でなく意識が却つて表現に於ける『主觀の客觀化』によりて成立する事は前に明かにした事である。意識は生命の一面であつて生命の全體は意識的超意識的と云はねばならぬ。客體が意識に對して超越的なる如く、主體も亦意識に對しては超越的である。たゞその超越性が様式を異にするに過ぎない。表現的立場は先づかゝる超越的主體の實相を知らうとする立場として現れるのである。主體は自らを客體に表現することにより、次にかゝる表現の了解を媒介することにより初めて知らるゝ。——理性の自己認識なる批判哲學はかくして自然の解釋によつて成立するものであつた。こゝより理性の普遍的法則性は自然に表現せられて解釋せられた限りの普遍的法則性なる事、換言すれば自然の表現はそれが解釋せられた限りに於て表現なる事が明かであらう。従つて理性或は自然の普遍的法則性は原理上非完結的相對的のものでなければならぬ。表現的立場に立脚する限り完結的絶對的な普遍性に到達することは不可能である。何となれば現在到

達せられた普遍性はその時々<sup>々</sup>に於ける普遍性であつて、それが完結的絶對的なる事を保證する原理は何處にも存しないからである。表現的立場は相對主義的立場である。カントが十分認めなかつたこの事態は當然認めらるべき事柄であると云はねばならぬ。カントの精神を繼承するマールブルク學派が範疇の體系を非完結的とし認識に相對性を自認する事はカントの意をより徹底したものと云ひ得るであらう。——然らばもし絶對的完結的普遍性が要求せらるゝとするならば之は如何なる立場に於て實現せらるゝであらうか。その立場は最早や表現的立場であることは出来ない。而もカントによれば、道德的實踐はかゝる絶對的完結的普遍性を要求する。従つて道德的實踐は表現的立場を超える所に成立しなければならぬ。事實カントが『實踐理性批判』に至つてこの表現的立場を超越し、それを要請として建立したのはこの理由に基くに外ならぬ。

我々は次に『純粹理性批判』に於ける『表現的なるもの』の構造を去つて『實踐理性批判』に於けるその制限を明かにしなければならぬ。(未完)